

社会科学研究所と私

高橋 祐吉

社研の『月報』が400号を迎えたとのことである。400という数字になにか特別な意味があるわけではないにせよ、とにもかくにもここまで続いてきたことは慶賀に値する。しかしあらためて我が身を振り返ってみると、400号にもなんなんとする『月報』に執筆したのは268号のたった1回だけである。しかもその1回さえ、当時の編集担当のY氏に依頼されてなんとか書き上げた代物だ。つまり、私と『月報』との関係は情けないほど「淡白」なので、『月報』について書くことのできる思い出話などは残念ながら何も無い。だが社会科学研究所と私の関わりとなれば話は別だ。社研とのあいだにはこの間「腐れ縁」にも似た関係が続いた。

今でもそうだと思うが、私が入職した当時も社研と組合の二つの「務め」をこなすことは少しばかり生意気な新入りの「義務」のような雰囲気があった。昔からオッチョコチョイの私は、言われるままに（今では誰に言われたのかさえさだかではないが）社研の財政の仕事を担当させられ、その後手術と国内留学のドサクサのなかで事務局長を引き受けざるをえない羽目に陥った。「はりきりボーイ」(?)の麻島所長のもとで、91年から4年間の事務局長暮らしを体験したために、社研と私の関係は否が応でも「濃厚」となったのである。その痕跡は、今でも私のパソコンの文書ファイルに残っている。

その間大変だったのは『社研40年史』の仕事であり、逆に楽しかったのは韓国と中国に出かけたことである。ともに麻島所長だったからこそ実現した企画だと言っていいだろう。もともと「観光学派」を自認している私は、韓国でも中国でもアフター5にいろいろな人と意気投合し、盛り上がりたり盛り下がったりした。「類は友を呼ぶ」というのか「朱に交われば赤くなる」というのか、それもこれも経済学部の人のおかげである（本当に困ったものだ!）。しかし、近眼と斜視に老眼まで加わった私の眼から見ると、こうした意気投合は研究者のアカデミックなネットワークの亜種あるいは変種のようにも見える。もしかしたらまんざら捨てたものでもないのかもしれない。

95年の春から社研と私の関係は『月報』との関係のように「淡白」なものに戻った。正常化したと言ってもいい。ポスト「社研」後の現在楽しみにしているのは、『月報』に執筆することはもちろんだが(?)、来年3月のベトナム視察旅行に出かけることである。もちろん私は、彼の地でもアカデミックなネットワークを構築すべく奮闘努力するつもりであるが、それを先のような亜種や変種に変えようとする情力もきっと働くに違いない。そんな誘惑を断ち切るために、大枚2万円近くも出して購入した石川文洋氏の『写真記録ベトナム戦争』を、冬休みにじっくりながめておくつもりだ。